

第一回「はなやすり出版文化を考える会」資料

日時：2024年4月27日（土）

場所：名古屋国際会議場 433 会議室

テーマ

「定期刊行誌の役割について～月刊『HANAYASURI』休刊から考える」

資料作成 相地 透

### <月刊「HANAYASURI」の概要>

- ・2022年4月に第1号を発行。以降、2年間にわたり12月を除く毎月発行し、第23号（2024年4月発行）をもって休刊。
- ・毎月200部発行。総発行部数、4600部（うち、頒布数は1700～1800部ほど）。
- ・中綴じ製本、20～24ページ。
- ・出版社・書肆花鑑が、今考える大切な事がらを伝えることが主な目的。
- ・参加型の冊子を心掛ける。観察会への参加や、エッセイの寄稿をはじめ、冒頭の特集には関わってくださっている方たちの取り組みに関連したページを設けた。「書く」「作る」「読む」、それぞれのスタンスで関わってくださる方たちの間に、誌面を通して一緒に作っているという一体感が生まれることを心掛けた。

### <休刊の理由>

- ・年間購読者数が想定よりも少なかったため。
- ・考えていた企画が進まなかったため。

## <6つの編集方針より ①日常生活からの気づきをつづる>

- ・なるべく多くの人に継続的にエッセイを書いてもらえるようお願いした。
- ・「書く」というのは日常生活を送る上で、誰にとっても大切な技術なのだが、一般的に日常生活で文章を書いている人、書くことが好きな人は少ない。小学校、中学校、高校以降も書くことはしてきていても、苦手意識は強い。
- ・インプット・アウトプットという言葉があるように、書くことで「今、自分が考えていること」を整理し、意識的になれることがエッセイを書くひとつの醍醐味。
- ・書き手を育てていくことは、出版活動を継続していくために、もっとも大切な事と考えている。書ける人を探す、よりも、書ける人を育てる。
- ・編集者としては、なるべく書いた人の表現には手を加えずに、書いた人が意図する文章として適切になるよう整えることを心掛けることが大切。
- ・「HANAYASURI」内の文章は実名で書くというルールを設けていた。自分が今考えていることを実名で書くことは、読む人には、同じ人の名前があることで親しみに繋がる。書く人にとっては、自分の名前を公にすることで、丁寧に書くことへの意識に繋がる。書いて良かった、読んで良かったと、どちらも良かったと思えるような編集作業を常に心掛けないと思う。

## <6つの編集方針より ②身近な自然を見つめる楽しみ>

・冊子発行期間中（25 ヶ月）に開催した観察会・イベントの回数は以下の通り。

はなやすり観察会	26回
西味銃観察会	18回
観察会報告会	2回
ワイワイクラフトさん主催	3回
椋鳩十学習会	4回
合計	53回

・観察会のレポートは、毎回の記録になるとともに書く楽しさを覚えることへの導入にもなると考える。その会毎に気づいた事がたくさんあっても、時間が経過すると忘れてしまう。レポートは忘れた事を思い出すきっかけになるので、すべての会のレポートを掲載した。また、遠方に住んでいたり、時間が合わず参加できない人も参加した気持ちになれる。

・「はなやすり観察会」を開催する大きな意味合いは、身近な自然への入り口を案内すること。自然について詳しい科学的知識を持った人も、個人的な表現活動をしていて花鳥風月に親しみをもっている人も、子どもに自然とふれあう体験をさせたい人も、それぞれが自由に思っていること、感じた事を言葉にししながら、自然を観察する本質的な意味に近づいていく。それぞれ自由にしていても、本質的な部分の捉え方がバラバラにならないことが大切。今後も開催を続け、「大自然」と言われるような場所を訪ねなくても、少し足を伸ばせば行けるような身近な場所で、同じような感動を発見できることを伝えていけたらと思う。

### ●問題点

・自然の豊かさにふれることができる場所が、雑木林、田んぼ、海、川など環境を問わず激減していることが一番の問題点。

### <6つの編集方針より ③文学と自然>

・人々に親しまれている文学者たちの自然観を紐解き、それらの文学者たちが地域の自然について、どのように見て、考えて、自分自身の表現に繋げていたのかを知る。最初は紹介から入り、その後、発展した文化活動に繋げていく。

#### —具体例—

新美南吉の自然観 → 知多半島の写真と新美南吉の詩 → 約60日間の企画展示  
椋鳩十とふるさと喬木村 → 数回の喬木村訪問 → 椋鳩十を読む会発足

・これからも「文学と自然」の部分で出版活動をしていくにあたって、注目するのは、1900年代～1910年代生まれの文学者や文化人である。

#### —例—

椋鳩十、巽聖歌、永瀬清子、新美南吉、早船ちよ、金子みすゞ  
入江泰吉、犬養孝、いわさきちひろ、etc.

・これらの作家は大正の期間に子ども時代を送っている。明治維新以降の騒乱の時代が終わり、西洋文化の流入が庶民の間でも享受され始めた時代。西洋の文学や文化が広く紹介され始めた時代でもある（例、アンデルセンやシュピリ『ハイジ』などの物語、カール・ブッセなどの詩、ミレー、コロー、印象派などの絵画 etc.）。明治末期から大正にかけての文化的恩恵を子ども時代に受けたこと、その体験と自分の身近にある自然を重ね合わせて表現できた人たちが、特筆すべき文学的潮流を作っていると考え。そこを深く考えて掘り下げていき、大正から昭和にかけて、自然を見つめた作家の文学を再編集していくことで、書肆花鏡の特色があらわれた出版物をつくっていく。

#### <6つの編集方針より ④表現する人たちの作品発表の場>

・今回は「詩」と「絵」が中心だった。「HANAYASURI」の方針にシンパシーをもってもらえる表現者の方たちと今後も出会っていききたい。

#### <6つの編集方針より ⑤未来を創る子ども達を育む>

・全23冊で「子どもたちを育む」部分を担って頂いたのは、相地満さん「チェイン・オブ・ライフ」と森下京子さん「子どもが不思議と出会う時」。それぞれの連載は、子どもと、子どもを取り巻く日々の環境を、大人がしっかり考える大切さを教えてくれている。

・子どもの成長を大切に考えるのは大人であれば誰しも同じだと思うが、独りよがり、グループよがりにならないことを、気をつけた方がよいと思う。時代の流行ではなく、普遍的に大切なことがらを心で理解し、それを基盤にして、自分の人生を組み立てていけるよう、子どもたちを見守り、周囲にいる大人全員で関わっていくことが大切になっていくと思う。

・学校教育では、公立・私立を問わず、自分たちの学び舎近くにある自然と触れ合う機会を継続的に設けて、自然を保護する大切さだけでなく、観察する楽しさや不思議に驚くことまで授業で出来る教育者の方々が増えると、もっと良くなるのではないか。

#### ●疑問点

・「子ども」と「大人」の違いは何だろう？

## <6つの編集方針より ⑥世代を繋いでいく誌面制作>

・世代を繋ぐ、というのは、みんなで繋がろう、ということではない。多様な考え方や生き方が尊重される現代において、すべての人に「HANAYASURI」の考え方が浸透するとは思わない。丁寧に伝えていけば、響く人には響くだろうが、響かない人には、なかなか響かないだろうと思っている。だが、たとえ響かなかったとしても、対立してはいけない。

・「自然」のことで言うと、世代ごとの自然観には差がある。生活の身近に、まだ田んぼや原っぱがあって、虫捕りをしたり、花を摘んだり、採ってきた植物を食べたりした子ども時代の体験をもっている人たちには「HANAYASURI」の考え方は響きやすいと思う。

・「同世代」の感覚は、近い年に生まれたということだけでなく、子ども時代に良くも悪くも享受した「文化の共通性」から生まれる。私たち 1980 年前後の生まれであれば、ポップ・カルチャーがもっとも華やかだった時代。100 万枚を超える CD 売上、ハリウッド映画の全盛期、共通した漫画雑誌やテレビ番組の話題など。そういった子ども時代の文化的バックグラウンドに対して、どのようなスタンスをとっていたかはそれぞれ違う。熱心に受け取っていた人もいれば、全く関心を持たなかった人もいる。けれども、身近にあった文化を思い出して、それぞれの記憶を重ね合わせられることが、「同世代」であるということだと思う。

・文化的なことがらは、まだ何も知らない子ども達の人生観に少なからず影響を与える。現代において、日々何もしていなくても目や耳に入ってくる流行に馴染めず、苦しんでいる子どもや若者がいるとしたら、そこに居場所を作ろうとしなくても良いと伝えることが、これから目指す出版活動の軸であり、自分が生きてきた時代ごとの文化を自分自身の感性できちんと取捨選択してきた大人の役目だと思う。